

ロシア語詳解辞典の規範性と各種アカデミー辞典

——〈小辞典〉の新展開に因んで——

源 貴 志

はじめに

2016年、ロシア学術アカデミーのヴィノグラードフ記念ロシア語研究所の編纂にかかる『アカデミー・ロシア語詳解辞典』⁽¹⁾の刊行が始まった。

これは、200年余の伝統を誇る、アカデミー・ロシア語辞典の系統を引くものであり、小論の筆者は、かつてこのロシア語アカデミー辞典の系譜を、辞書編纂史 (история лексикографии) の視点から3篇の論文で追跡したことがある⁽²⁾。

この『アカデミー・ロシア語詳解辞典』の刊行が開始されるのに先立って、この辞典の編集代表である、L. P. クリーシン (Л. П. Крысин) によって『ロシア語辞書のはなし』というタイトルの教科書が出版されている⁽³⁾。上記3篇の論文の一つ (註2の2.) では、M. A. ボブノーワ (М. А. Бобунова) の『21世紀のロシア語辞書編纂史』⁽⁴⁾を参看しつつ、21世紀におけるロシア・アカデミー辞書の伝統継承について考察したのであったが、ボブノーワの著書が高等教育機関の教科書として、なかば学術書としての性格を持つものであるのに対して、クリーシンの著書のほうは、同じく副題に教科書と銘打ちながらも、学童向けに、ロシア語辞書編纂史についてやさしく語ったものである。しかし、なんと言ってもこれは、現在進行形のロシア語アカデミー詳解辞典編輯の中心にいる人物による著述であり、学童向けとは言いながら、そのためかえって要領を得た、わかりやすい記述となっているところが注目される。

そこで、本稿ではこのクリーシンの著書を参看しつつ、上記の3篇の論文で触れることのできなかった、詳解辞典以外の各種アカデミー辞典を含めた編纂史の全体を概観しておきたい。のちに述べるように、それら各種アカデミー辞典も、ロシア語の〈総体〉を記述して広く研究に供する、その一翼を担うものとして、アカデミー辞書の伝統のなかに重要な位置を占めるものであり、ボブノーワの著書、クリーシンの著書の双方とも、それらの辞書の編纂史に多くのページを割いているからである。

1. 規範辞書としてのロシア語詳解辞典

冒頭に挙げた、新規刊行の『アカデミー・ロシア語詳解辞典』は、1957年～1961年に初版が刊

行され、次いで1981年～1984年に改訂第2版が出版された4巻本『ロシア語辞典』⁽⁵⁾を継承するものであることが謳われている。この4巻本辞典は、一般に〈アカデミー小辞典 (МАС — Малый академический словарь)〉と呼ばれるものであるが、これは、〈アカデミー大辞典 (БАС — Большой академический словарь)〉 (1948年～1965年、全17巻)⁽⁶⁾に対する通称である。〈大辞典〉のほうは、改訂版の刊行が、1991年に全20巻を予定して始まったものの、1994年に第6巻までを出して一旦中断され、2004年にあらためて第1巻からの刊行が始まって、現時点 (2017年夏) で第23巻まで刊行が進んでいる⁽⁷⁾。

新規の『アカデミー・ロシア語詳解辞典』は、2016年中にとりあえず第2巻までが刊行された。第2巻はアルファベットの〈Г〉の項目までを収めており、これは普通、ロシア語の辞書の分量の8分の1弱に当たるので、完結すれば全12～15巻の規模になるものと考えられる。〈小辞典〉の継承とは言いながら、巻数にして初版および第2版の3～4倍のものになるわけである⁽⁸⁾。

ここに挙げた辞典はいずれも、1789年 (フランス革命勃発の年) に刊行の始まったアカデミー・ロシア語辞典の系譜のなかに位置するもので、〈大辞典〉〈小辞典〉はともにその正統を受け継ぐもの、そのほかに全4巻や1巻本のかたちで数種のロシア語詳解辞典が20世紀半ばから21世紀にかけて刊行されている。

先に触れた論文の一つ (註2の1.) では、〈規範性〉という概念をキーワードとして、200年を超えるロシアのアカデミー辞典編纂の歴史が、〈国語〉としての規範をより強く示すものとして辞書としての収録範囲を抑制する方向を採るか、ロシア語の〈総体〉を記述するものとして、収録範囲をできるだけ拡張する方針を採るか、2つの考え方のあいだで揺れを生じてきたこと、しかし、20世紀の半ば以降の刊行にかかるものは、概ね (辞書によってなお多少の揺れを生じながらも) 規範辞書 (нормативные словари) の性格を有していることを確認した。

すなわち、多くの近代国家の例に漏れず、ロシアにおいてもロシア語を〈ネーション〉の言語——〈国語〉として充実・発展させるというのは、重要な国家政策の一つであった。そして、そのために設立されたのが帝室ロシア・アカデミー (Императорская Российская Академия) であり、その事業の2つの柱となるが、ロシア語文法とロシア語辞典の編纂とであったわけであるが、国家的な政策上・教育上の都合から言えば、その辞書が規範辞書の性質を帯びることになるのは当然のことであった。

しかし、実際の辞書編纂の歴史においては、ロシア語の〈総体〉——文化的な遺産としてその全体——を記述しようという指向がつねに存在していて、ロシア語詳解辞典の編輯方針は、辞書の収録範囲を拡張しようとするのか、抑制しようとするのか、つねにある種のせめぎあいを見せてきた。そして結局は規範辞書としての性格が貫かれるなかで、辞書の持つ〈規範性〉というのは、辞書の収録範囲を定めるに当たっては、抑制的な役割を果たしてきた。

例えば、現在の国民の言語生活の規範を示すものとして、かつては文化的な価値を持ち得たも

のであっても、現在は用いられなくなってしまった語彙や、あるいは現在使用されているものであっても、特定の地域・集団でのみ通用し、広く国民一般に知られていないような語彙は収録範囲から排除される。

じつは排除の問題は、辞書の見出し語としての収録語彙選択のレベルのみに関わるものではない。ロシア語使用者にあまねく知られていると見なされる単語についても、一部の地域や特定の社会的集団のみで使用・理解されるような語義とその説明とは排除の対象となる。また、アクセントについても、時代とともに変化があるものであり、ときには規範的に誤りとされるアクセントがあったり、あるいは、ある特定の集団のみで使用されるようなアクセントといったものがあったりもして、ここにも辞書編纂上の取舍選択の問題が生じる。

いずれにしても、規範辞書としてのロシア語詳解辞典には、さまざまな面で排除と抑制の論理が働いているわけである（ただし、収録範囲において排除と抑制の論理が働いているからと言って、それに連動して、辞書のボリュームや、それが提供する情報量が小さくなるとは限らない）。

では、具体的にどのような要素が〈排除〉の対象となるのか、ポップノワ、クリューシンの著書の目次立てなども参照にしつつ、模式的に示してみると次頁の図のようになる。

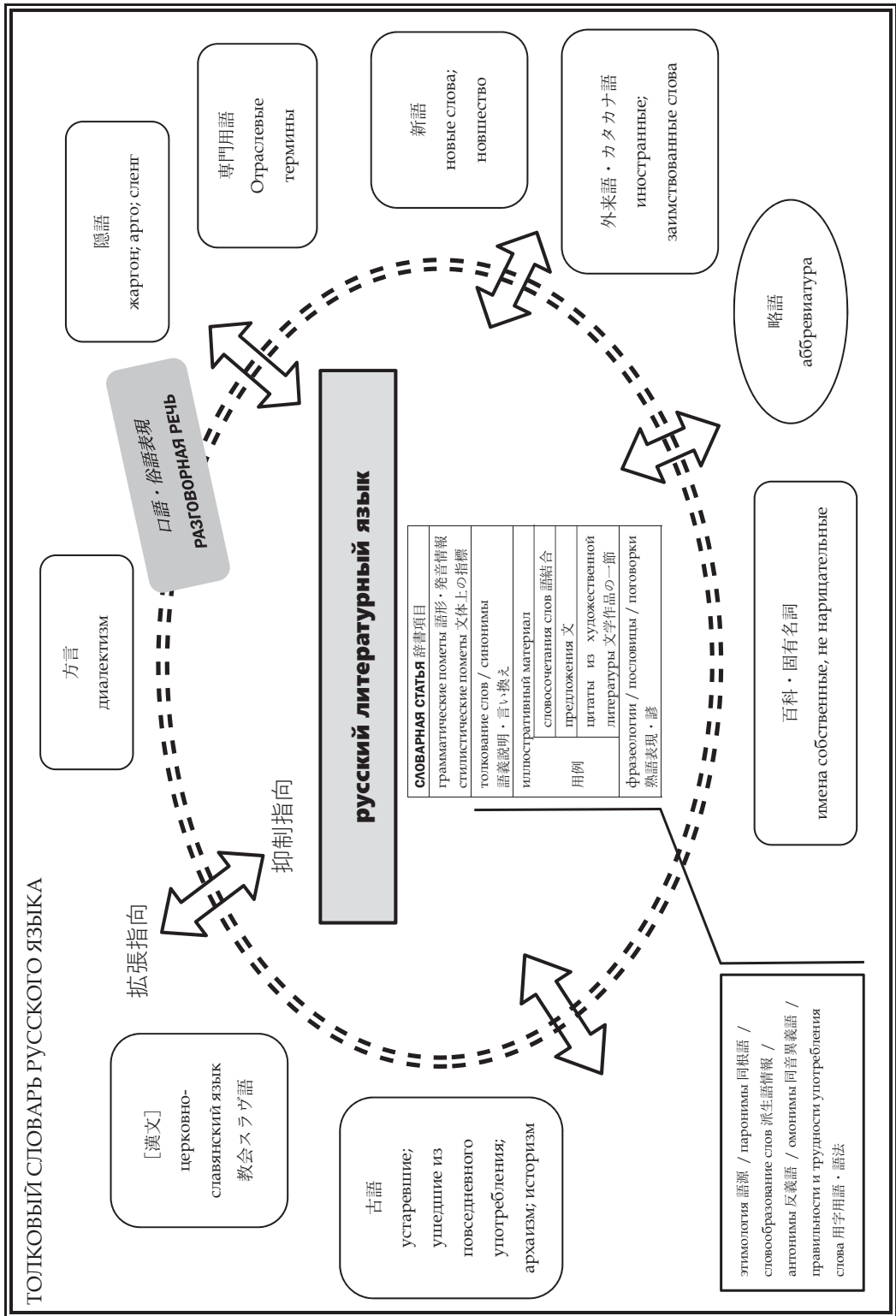
詳解辞典で排除の対象として示した項目（図では楕円の外に記入）については、必ずしもこのような分類・整理のしかたが妥当であるか、また、遺漏なきかを保証し得ないが、ポップノワやクリューシンもほぼ同様の整理を行なっている（なお、小論の筆者が30年来補訂を続けている参考図書目録⁽⁹⁾でも同様の分類を前提とするに至っている）。

そして、一方これらの各項目は、規範辞書としてのロシア語詳解辞典からは排除の対象となつてはいても、〈総体〉としてのロシア語の豊穡さの一部として記述の対象から逸することができないものとして、それぞれ個別にアカデミー辞書の編纂対象となっている。学術的な立場からは当然のこととは言え、これらの辞書がやはり国家事業の枠組みのなかで編纂が進んでいることは、排除の論理や純粹性の追求よりも、貪欲な包摂性と豊穡さを誇り、そのうえでの全一性を求める性格の強いロシアのナショナリズムにふさわしい現象であるかも知れない⁽¹⁰⁾。

そこで、以下では、それら詳解辞典から排除された各項目が、アカデミー辞書の伝統のなかで、どのような辞書に反映させられているのか、概観を行なうものとする。

なお、図では〈排除項目〉を平面上に配列しているが、これらは、必ずしも同一レベルのものであるわけではなく、それが単に見出し語の選択の問題にのみ反映されるわけでないことは上述のとおりである（なお、図の中の日本語は参考のために付したものに過ぎない）。また、図のなかで、「辞書項目」の枠に挙げた各要素は、収録語彙上の排除の対象というわけではなく、辞書記述の詳細さ、あるいは記述の深淺といった面にかかわっていたり、あるいは語彙の理解のためというよりも語彙の利用のために辞書が提供する情報にかかわっていたりするものであるが、これらの各要素についても、個別にアカデミー辞書が編纂されている場合があるので、以下であわ

ТОЛКОВЫЙ СЛОВАРЬ РУССКОГО ЯЗЫКА



せて概観しておく。

2. 詳解辞典以外の各種アカデミー辞典（領域の拡張）

古語辞典 日本で「古語辞典」という書名で流通しているのは、〈古文〉を読むための辞典で、高等学校生徒向けの学習辞典のかたちになっているのが実際のところである。大まかに言えば、文語によって書かれた文章、時代的には近世、江戸時代までのものを読むための辞典ということになるだろう。

ロシア語の場合、「プーシキン以後」という言い方があるとおり、現代ロシア語の理解力で、おおよそ19世紀前半のプーシキンまでは遡って読むことができるというのが一応の了解となっているが、当然ながら200年近い歳月のあいだに、一定数の語彙は一般には使用されなくなっている。

しかし、現代のロシア語の詳解辞典は、表向き20世紀から21世紀はじめの〈国語 русский литературный язык〉⁽¹¹⁾の語彙を反映することを謳いながらも、ある程度の量の〈古語 архаизм; историзм〉や〈方言 диалектизм〉を収録している。そして、これらは「プーシキンから現在までに至るロシア文学作品において出会うもの」であるとされている⁽¹²⁾。

したがって、ロシア・アカデミー辞典のなかの古語辞典とは、〈現在のロシア語の構成からは隔たった語彙について解説するもの〉という性格が与えられている。

なお、ロシアでは「古語辞典」に当たる名称で定着したものはない。そのため、前記「参考図書目録」（註9）では「исторический словарь памятников (древнерусской) письменности（中世ロシアの）古文獻遺産歴史辞典」という煩雑な名称の項目を立てておいた。このたびクリーシンの著書では明確に「古語辞典 исторический словарь」という用語で小見出しを立てているのだが、本文中では必ず「古文獻遺産の памятников письменности」という表現を伴わせている。

ロシアの古語辞典で現在までに完結している最大のものは、I. I. Срезневский (И. И. Срезневский) の辞書 (1893年～1912)⁽¹³⁾である。革命前の刊行で、個人著者の扱いになっているが、学術アカデミーの出版にかかり、ソ聯時代にも、複数回再版が行なわれている。

そのほか、70年代以降に分冊形式（註8参照）で刊行の始まったものが2種ある。一つは1975年刊行開始の『11世紀～17世紀ロシア語辞典』⁽¹⁴⁾で、現在まで第30分冊までが出て、これでおおよそ全体の8分の7というところである。もう一つは、1984年刊行開始の『18世紀ロシア語辞典』⁽¹⁵⁾で、現在まで第21分冊、これはおおよそ全体の8分の5前後というところであろうか。いずれもこの先いつ完結するのか予想のつかない、壮大な事業である。

まだ、これとは別に、『中世ロシア語辞典（11世紀～14世紀）全10巻』（第10巻まですでに刊行されたが、全体のほぼ4分の3）もアカデミーの編纂である⁽¹⁶⁾。

新語辞典 新しい語彙の取捨選択の問題ほど、辞書を編纂する立場にとってアクティブな問題も

そう多くはないだろう。新しい語彙は日々刻々生まれつづける。その一部は定着し、その他はあっという間に消え去ってしまう。定着した語彙もそれと同時に古びはじめ、あるいは意味するところに変化が生じ、新たに生まれた語彙に取って代わられてしまう。

ロシア語に関しては、1991年の社会主義体制の崩壊の前後で大きく様相が異なる。出版、というよりも印刷そのものを国家が管理をしていたソ聯時代にあっては、〈新しい語彙〉の管理はある意味容易であったと言える。そのような言わば国家による語彙の管理を反映するものとして、ソ聯時代には N. Z. コテロワ (Н. З. Котелова) によって年ごとの『ロシア語の新語彙』が刊行されていた⁽¹⁷⁾。その内容は10年ごとに1冊の辞典としてまとめられ⁽¹⁸⁾、最終的には『1950年代半ば～1980年代半ばのロシア語新語辞典』⁽¹⁹⁾が刊行された。

体制崩壊後(90年代以後)の新語については、社会の流動性に鑑みれば、詳解辞典におけるきわめて抑制的な収録方針以外には、どのような権威付けも行なわれようがないわけであるが、それでもクルイーシンの著書は、G. N. スクリャレフスカヤ編輯の2種の辞典(20世紀末/21世紀はじめ)⁽²⁰⁾を挙げている。

しかし、図においても互いに近接した項目として示したように、新しい語彙という点からすれば、外国語(とくに英語)からの借用語、あるいは外国語の単語そのままの使用、ラテン・アルファベットとキリル・アルファベットの混合表記語(TV-программа, e-mail-адрес など。クルイーシンの著書ではケンタウロス語 слова-«кентавры»と呼ばれている)などの関係から、むしろ外国語語彙の問題が重要な比重を占めると見なければならず、クルイーシンの著書では、この外国語語彙辞典の編纂の問題に多くのページを割いている。相応の年月を経てロシア語のなかに定着した〈外来語〉とは異なり、最新の概念・事物を指す語彙の説明を与えるものとして、そのカバー領域は新語辞典と重なる部分が大きいわけである。

クルイーシンは、このような役割を果たす多数の外国語語彙辞典の名を挙げているが、ここでは、クルイーシン自身が編纂した最新の『現代外来語辞典』(2014年)⁽²¹⁾をアカデミー辞典の一つとして挙げておく。

外来語辞典 新語辞典の隣接領域としてではなく、長期にわたってロシア語の日常的な使用や、文学作品のなかに定着している(あるいは、かつて定着したことのある)外来語語彙については、当然、ロシア語詳解辞典の収録対象となっているわけであるが、定着の度合いの低いものをも視野に入れつつ、アカデミー辞典は〈外来語〉を独立した編纂領域としてきている。「外来語辞典 Словарь иностранных слов」と称するもの、あるいはそれに近い名称を持つものは、きわめて多数にのぼるが^(*)、アカデミー辞書としてこの書名を持つものは、1939年に初版が刊行され、以後80年代までに5回の改訂を経ながら、13版を数えた⁽²²⁾。

このほかアカデミーの編纂にかかるものに、「原語のままロシア語のなかで使用される外国語

表現辞典」(1966年初版)⁽²³⁾と「ラテン語名句辞典」(1982年初版)⁽²⁴⁾があるが、いずれも、ロシア語の日常使用のためのものというよりは、やや高尚な読書・研究に資する性格のものだろう。

方言辞典 距離的な隔絶の程度の割に方言の差異が大きい日本語の場合と異なり、ロシア語は方言差の緩やかな言語と言われる。したがって、日本語における「標準語／方言」という対立をそのままロシア語に適用して考えることはできない。そもそもロシア語詳解辞典が対象としている言語を表わす *русский литературный язык* という用語は日本語には訳しようがなく(註の11を参照)、すでに使用されなくなった語彙や、いまだ定着していない語彙、また、ひろく一般に使用されるのではなく、特定の地域・集団のなかでのみ通用する語彙——それらを排除したものという点では「(方言に対立するという意味での)標準語」の概念に近いが、クルイーシンの著書の著書では繰り返しこの用語を〈規範性〉を持つものとして説明しており、その意味ではやはり「国語」に近い用語である。

当然、ロシア語詳解辞典の収録範囲から方言語彙は排除される傾向にあるが、その代わり、学術アカデミーに属するさまざまな研究機関が、多数の方言辞典を編纂している。しかし、〈アカデミー辞典〉という概念を、学術アカデミーのロシア語研究所(ИРЯз — Институт русского языка [имени В. В. Виноградова])あるいは言語学研究所(ИЯз — Институт языкознания / ИЛИ — Институт лингвистических исследований)⁽²⁵⁾などの編纂にかかるものに限るとするならば、アカデミー方言辞典と言えるものは2種類ほどにとどまる。

一つは、分冊形式で1965年に刊行が始まった『ロシア語方言辞典』⁽²⁶⁾だが、いまだに完結していない(2016年に第49分冊、あと数冊での完結が見込まれる)。もう一つは、『現代ロシア語方言辞典(リャザン地方リャザン地区デウリノ村)』⁽²⁷⁾というもので、これはある程度の広がりをもつ領域内でのさまざまな地域の使用語彙を一つの辞書に集成し、混在させるといったものではなく、一つの生活圈としての村の語彙の総体を記述しようとする試みである。一つの生きた言語の記述辞書としての極北にあるもので、規範辞書とは対蹠的な性格のものである。

このほか、規範辞書としてのロシア語詳解辞典からの排除の対象となりやすい項目として、先の図では「専門用語」(これは「新語」と隣接し、オーバーラップしやすい)と「隠語」とを示しているが、これらは「方言」とともに規範辞書から強く排除されながらも、むしろ近未来の収録語彙の候補を多く含む領域であると言うことができるだろう。

ソ聯時代であれば、「隠語」のアカデミー辞書などはとても考えられることではなかったが、今日では少なくとも次の2種を挙げることができる——「ロシア語隠語大辞典」(2001年)⁽²⁸⁾、「ロシア語隠語 語史・語源辞典」(2009年)⁽²⁹⁾。

3. 詳解辞典以外の各種アカデミー辞典（辞書項目の深化）

前章では、ロシア語詳解辞典の収録範囲から排除される対象となるような項目についても、別途それぞれにアカデミー辞典が編纂されて、詳解辞典と補い合っただけでロシア語の〈総体〉を記述するかたちになっていることを確認したのだが、本章では、収録語彙の排除の対象というわけではなく、辞書項目の記述を詳細にし、記述を深めるといった面にかかわる各要素についてそれらを取り立てて個別に編纂するタイプのアカデミー辞書各種について概観する。これらの辞書が内容とする情報は、容量（紙幅）さえ許すのならばロシア語詳解辞典の辞典項目中に記述されていてもおかしくないのであって、それら各種辞典と詳解辞典とは、必ずしも互いに排他的に存在するものではない。

正書法辞典・文法辞典（орфографический словарь; грамматический словарь）この2つのカテゴリーは、厳密には目的の異なるものであるが、要するに、ロシア語単語の正しい〈綴り〉を示し、必要に応じて、その綴り（語形変化など）についての説明を提供するものとして総括できるだろう。大文字と小文字の使い分けの辞典や⁽³⁰⁾、合成語表現について、[分かち書きをするのか、ハイフンでつなぐのか、それとも直接綴りをつなげてしまうのか]を示すことだけを目的とした辞典など⁽³¹⁾、大小、数多くの辞典があるが、アカデミー版の『正書法辞典』は1956年に初版が出て、以後1、2年ごとに版を重ねている（5年に1度程度、改訂が行なわれている）⁽³²⁾。

正音法辞典・発音辞典（орфоэпический словарь）ロシア語の単語は、アクセントの位置さえわかっているならば、若干の規則の心得は必要であるものの、綴りどおり読めばよいというのが前提であるが、アクセントの位置自体がかなり不規則に移動することもあり（とくに受動形動詞過去など）、この種の辞典はじつはかなり使い出がある。とくに人名・地名のアクセントの位置に関しては辞典での確認が欠かせない。

アカデミー版の正音法辞典としては、1950年代以来、『ロシア語標準のアクセントと発音』⁽³³⁾と題する辞典が用意されている一方で、発音辞典としては実用向けの『ラジオ・テレビで働く人向けのアクセント辞典』⁽³⁴⁾が広く使用されていたが、1983年になって、本格的なアカデミー版の『正音法辞典』⁽³⁵⁾が刊行された。

同義語辞典（словарь синонимов）「ロシア語詳解辞典」の「詳解 толковый」というのは、語義を丁寧に解説するという意味であるが、1巻本の詳解辞典の代表のように言われるオージェゴフの辞典などでは、語義の詳しい説明はあまり見られず、同義語を並べることで解説に代えている場合が多い。つまり、実質的には同義語辞典と言えるかも知れないのである。ただし、オージェ

ゴフ辞典などの詳解辞典が、読者に単語の意味を理解させることを主たる目的とするものであるのに対して、同義語辞典として独自に編纂されるものは、ロシア語のアクティブな使用（文章を書くなどの場合）における同義語の使い分けのための説明を与えたり、参考にできるようにするものである。もちろん、多巻物の詳解辞典であれば、辞典項目のなかにそのような同義語の使い分けの情報があっても差し支えないことになる。

ソ聯時代で最も詳しい同義語辞典は、1970年から翌年にかけて出版された2巻本である⁽³⁶⁾。これに対して、ソ聯体制解消後に出ているのは、1997年～2003年に刊行された3分冊のものである⁽³⁷⁾。

反義語辞典・同音異義語辞典・同根語辞典 (словарь антонимов; словарь омонимов; словарь паронимов) これらの辞典が提供する情報は、やはり詳解辞典の辞典項目のなかに含まれていてもおかしくないもので、これらの独立の辞典は正直のところ、それほど使い出のあるものではない。それぞれ代表的なものとしては、1978年初版『ロシア語反義語辞典』⁽³⁸⁾、2002年刊『現代ロシア語同音異義語辞典』⁽³⁹⁾、1994年刊『現代ロシア語同根語辞典』⁽⁴⁰⁾がある。

語結合辞典 (словарь сочетаемости слов) 「語結合」という言葉には、その指し示す内容においてかなりの幅がある。上記のように、オージェゴフの辞典では、語義説明を、同義語を並べることに置き換えていると言えるのだが、用例についても、スペースの制約から、小説の一場面をそっくり引くなどということはもちろん、独立した文（センテンス）全体を掲げることもまれで、多くの場合、見出し語を含めた複数の単語を結合させた語句表現で済ませている。これは、辞典項目のなかの用例として示された「語結合」である。もちろん、ここに示される語結合は、見出し語の具体的な使用法として、日常的に展開してよいというお墨付きを与えられたことになる。しかし、それらは、あくまで単語の意味を了解させるために用意されたものであり、見出し語の積極的な利用（その単語を用いて作文するなど）の参考とするには十分な量ではない。とくに基本的な数千語の語彙について言えば、その見出し語を含む自然な（突飛でない）語結合（見出し語が名詞である場合、それにあわせて使う形容詞にはどのようなものがあり得るか、見出し語が動詞であれば目的語にはどのようなものがあり得るか、など）については、相当の量の語結合が示され得るはずであるが、一方、じつは自然な結合というものは、数限りなくあるというものでもなく、日常的にはある程度に限定されるものである。そこで、見出し語の数をある程度絞って、日常的で自然な語結合を羅列し、かつ、模範的な例文を多く示すような辞書が考えられる。このような、とくに作文のために有益なものとして定評のあるのが、1978年にプーシキン記念ロシア語研究所の編纂で出された『ロシア語語結合学習辞典』⁽⁴¹⁾である。

このような性質の辞典は、実践的な場面においては有益な規範（模範）を示してくれる。しか

し、実際にはそこに示された実例以外の語法がまったく許容されないものであるというわけではない。つまり、実用的な辞典ほど、見かけ上の規範性が強く、強権的な性格を持つ。一方で、ロシアのアカデミックな規範辞書は、方言や新語、古語などの夾雑物が入りこむことに対しては厳格に抑制的であろうとするが、文体的な指標（「この用法は口語的」、「この単語は雅語」といった標示）や、具体的な語法の指示（「この単語をこの格支配で使用するのは誤り」、「この単語をこの語結合で使用するのは誤用」という種類の断定）といったことに対しては、かえって自らに抑制的であり、緩やか（寛容）であろうとするのが普通である。

同様に、語結合以外の、単語のさまざまな使用法についての辞典（словарь трудности; словарь правильности употребления слов）は、一般に、アカデミー辞書の守備範囲とはなかって来なかった。一方、実用的な便覧については、これはよし、これはダメ、と具体的な指示を与えてくれる強権的なもののほうが、読者には重宝されるわけである。

熟語辞典・諺辞典（фразеологический словарь） これも、詳解辞典の辞典項目のなかにある程度は含まれている情報であるが、その場合、スペースの関係から、とくに多くの用例を期待することはできない。そこに独立した熟語辞典が成立する余地があるわけであるが、19世紀のダーリの辞書に採録された用例の多くが、諺や名句で占められていることはよく知られているし、20世紀以後も多くの熟語辞典・諺辞典の類が編纂されている。ソ聯時代のものとしては、1967年初版の「ロシア語熟語辞典」⁽⁴²⁾、90年代以来再版を繰り返している「18世紀末～20世紀ロシア語熟語辞典」（全2巻）⁽⁴³⁾があるほか、21世紀になると『ロシア語熟語大辞典』（2006年）⁽⁴⁴⁾がある。これらは、必ずしも学術アカデミーのロシア語研究所や言語学研究所の編纂物ではないが、アカデミー辞書に準じる性格を持つものである。また、熟語辞典については、学習者向けのものに、使い出のある便利なものが多い^(**)。

派生語辞典（словообразовательный словарь） 派生語辞典としては、学習者が語彙を増やすための参考となるような簡便なもの、と、詳解辞典の収録語彙の枠を越えて、単語派生の可能性を示すような学術的な辞典の2種類にわかれる。後者には A. N. チーホノフ（А. Н. Тихонов）の『ロシア語派生語辞典』（全2巻）⁽⁴⁵⁾がある。

語源辞典（этимологический словарь） 単語の語源情報は、詳解辞典でも、例えばウシャコフの4巻本辞典において辞典項目の末尾に記入されているのを見ることができる。また、N. Yu. シヴェードワ責任編輯の『単語の起源情報を含むロシア語詳解辞典』（2007年）では、語源情報の表示のあることが書名にも謳われている。これらの辞書の語源情報は、至って簡単なものではあるが、じつは素人にはこの程度の情報がむしろ有益なものであろう。専門的な語源辞典として

完結しているものは、ファスマー (M. Vasmer) のドイツ語版をロシア語訳し、O. N. トルバチョーフ (O. H. Трубочев) が増補を行なった4巻本がある⁽⁴⁶⁾。分冊形式のものとしてはモスクワ大学で編纂されているものがあるが完結の見込みが立たない⁽⁴⁷⁾。一方、アカデミー辞書としては、やはり分冊形式の『ロシア語語源辞典』⁽⁴⁸⁾の刊行が2007年に始まり、2016年には第10分冊、全体のほぼ3分の1ほどまで進行している。

4. プーシキンか、ネットか (辞書編纂の現代的課題)

ここまで、ロシア語詳解辞典の収録範囲を補完するかたちで、詳解辞典の収録範囲から排除され得る領域を対象とする辞典や、辞典項目を深化させる要素を対象とする辞典が、それぞれ独立のアカデミー辞典として編纂されてきていることを概観した。このように、全体としてロシア語のさまざまな有り様を包括した〈総体〉を記述する体制がとられることで、一方において詳解辞典は規範辞典であり続けることを保証されているかたちとなっている。

クルイーシンの著書においては、詳解辞典の性格づけとして、その収録範囲を〈すでに使用されなくなった語彙や、いまだ定着していない語彙、また、ひろく一般に使用されるのではなく特定の地域・集団のなかでのみ通用する語彙を排除したもの〉とし、これを *русский литературный язык* (先にはこれを〈国語〉として捉えておいた) として定義したうえで、この *русский литературный язык* の辞典がすなわち「規範辞典」となるとしている⁽⁴⁹⁾。

しかし、先にも触れたように、辞書の〈規範性〉は収録語彙の範囲のみによって示されるわけではなく、語義の説明のしかたや、文体上の標記 (*стилистические пометы*) のあり方にも関わっている。例えば、ともに20世紀の半ばに成立を見た2種類の4巻本の詳解辞典 (ウシャコーフの辞典とアカデミー小辞典) のあいだでは、ウシャコーフの辞典が文体上の指標 (〈*口 разг.*〉、〈*古 устар.*〉、〈*雅 книжн.*〉などの標示) を用いて端的に評価を下す傾向にあるのに対し、アカデミー小辞典では、そのような標示を控えめにして、用例をできるだけ長く、おもに文学作品の一場面を理解できるようなかたちで引用することで、辞書の読者に語義のニュアンスを自得させる方法を採用している。ともに辞書の性格として (とくにその収録対象の範囲を一 *русский литературный язык* とする) 規範辞書であることにおいて2つの辞書は共通するのであるが、辞書項目の内部構成や、語義の示し方においては、ウシャコーフの辞典のほうが、より強い〈規範性〉を持つとすることができるだろう。

そのような〈規範性〉を持つ辞書の系譜に連なるものとして多くのアカデミー・ロシア語詳解辞典が編まれてきていることについては、すでに前記の論文3篇においてある程度詳しく見ているので (辞書のリスト、書誌事項についてはそれらの論文 [註2] あるいは「参考文献目録」 [註9] を参照されたい)、ここでは、冒頭で触れた『アカデミー・ロシア語詳解辞典』——まだ昨年 (2016年) に刊行が始まったばかりであるが——と、その編輯委員の一人であるクルイーシン

の著書のなかの記述について、注目すべき点にいくつか触れておきたい。

この『アカデミー・ロシア語詳解辞典』は、2010年代に入って刊行の始まったものであるだけに、また、従前の4巻本に比して大きく規模を拡大するものであるだけに、これまでのアカデミー・ロシア語詳解辞典とは一線を画す性格のものであることが期待される。

拙稿「ロシア・アカデミー辞典の系統図——継承の実際——」（註2の3.）の末尾においては、膨大な情報量を瞬時に扱えるコンピュータの処理能力、人間の手作業ではとてもおよびもつかない高速かつ確実な検索能力、ネットワーク上の膨大なロシア語データからプログラム次第で必要な情報を取り出し得る——すなわち巨大きわまりないビッグデータから辞書編纂の対象とできる今日の環境、そういったものにそれまでの辞書が十全に対応し得ているのかという問題について、概ね否定的な見解を示しておいた。20世紀末から21世紀のはじめにかけて刊行された（あるいは刊行が開始された）アカデミー・ロシア語詳解辞典はいずれも、直接には19世紀以来（仕事の伝統としては18世紀以来）蓄積されてきたロシアの用例カードに拠るところがまだまだ大きいことを指摘せざるを得なかったのである。

今回、新しく刊行の始まった『アカデミー・ロシア語詳解辞典』の編集委員の一人であるクリューシンの著書には、以下のような記述が散見する（以下、クリューシンの著書からの引用は、末尾に[41]のように頁数のみを記す）。

[詳解辞典においては] 語義説明のあとに、その単語が用いられている文学作品からの引用や諺の類い、あるいは辞書編纂者の作成になる短文や語結合が示されることになる。[41]
下線は引用者、以下同]

この辞書[帝室ロシア・アカデミー辞典]の資料を蒐集したのはD. I. フォンヴィージン、G. R. デルジャーヴィン、I. F. ボグダーノヴィチ、A. I. ムーシン＝プーシキンそのほかの、著名なロシア文学者たちである。[75]

この辞書[ウシャコーフの辞典]で大きな位置を占めるのは用例である。それはあるいは文学や社会評論、そのほかの資料からの引用であり、あるいは辞書編纂者の作成になる語結合である。[81]

今日までのあいだに、アカデミー大辞典[17巻本]はかなりの程度古びてしまっている。それはとくに用例の部分においてであり、そこではとくに多くを占めているのは、19世紀の作家や社会評論家の著作からの引用である。[88]

これらの記述は、あくまで既存の詳解辞典の、〈文学〉に重点を置く特性について述べたものである。さらに、さきほど「古語辞典」の箇所でも引用した部分（「プーシキンから […]」）を加えることができるだろう⁽⁵⁰⁾。そのうえで、「現代ロシア語詳解辞典の革新の問題」と題した箇所には次のような記述が見られるのである。

すでに古びてしまったものや、国語にとって周知的にすぎないものを除去することは慎重に行なわれなければならない。なぜならば、19世紀から20世紀前半の古典文学には、現代のロシア語の状況から見て疑いようもなく古物や珍品というべきものが多く見受けられ、そのために読者にとっては辞書が重要な助けとなるからである。[98]

一方で、当然のことながら次のような記述もある。

現代のロシア語テキストからの新しい引用によって用例を補完して行く際のリソースとして役立つのは、ロシア語ナショナル・コーパスその他のサイト、インターネット・ポータルである。[105]

すなわち、現在のロシア語詳解辞典の編纂においては、極端に言うところ（プーシキンか、ネットか）という問題が存在するのである。もちろん、それは両立しなければならない。いくら新しい技術を生かして今日の言語環境に対応した辞書が編纂されても、それでプーシキンが読めなくなつては、元も子もないからである。

新しい『アカデミー・ロシア語詳解辞典』は、わずかに2巻の刊行を見たのみであり、まだ十分な評価のできる段階ではない⁽⁵¹⁾。200年に及ぶアカデミー辞書編纂の歴史と伝統をいかに受け継ぎながら、新機軸を出していくのか、慎重に見守る必要がある。

クルイーシンの著書では、学童向けという事情もあるのか、拙稿（註2の2.と3.）で触れたような、オージェゴフの辞書やウシャコーフの辞典をめぐる、90年代以降の混迷した事情については一切触れられていない。また、この著書のなかで紹介されている各種辞書の書誌情報には、小論の筆者の把握していないものも多く、裨益せられるところが多かったが、筆者の把握しているデータと異なるものも幾分か見られた。正確な書誌情報を得ることが容易ではないのである。クルイーシン自らが以下のように述べざるを得ないのにはむしろ同情を感ぜざるを得ない。

21世紀はじめのロシアの書籍市場には、ありとあらゆる辞書が氾濫している。[…] それらのなかから選択を行なうには何を指針とすればよいのだろうか？ できれば著名な専門家の編纂になるものを選ばなければならない。学術アカデミーの各機関——モスクワのプーシキ

ン記念ロシア語研究所、サンクトペテルブルクの言語学研究所こそが、主要にして一般に認められた辞彙研究の中心であり、現代および過去にかかわるさまざまなタイプの辞書の編輯・編纂のセンターなのである。[177-178]

いずれにしても、優れた辞書の助けなしには、ロシア文学の作品に親しむことのできない我々には、クルイーシン氏をはじめとするアカデミー辞書の編纂スタッフが、先人たちの伝統を受け継ぎながら、よりよい、しかも革新的な辞書をこれから世に送り出してくれることを期待するしかないであろう。

注

- (1) Академический толковый словарь русского языка / РАН. ИРЯЗ. М.: ЯСК, 2016—。今回、辞典類の書誌記述については、改訂版等の情報をはじめ書誌情報の詳細を註4の文献ならびに後記「参考図書目録」（註9参照）に譲り、初版・刊行開始時を中心に、メインタイトルほかの主要要素のみを示す。
- (2) 1. 源 貴志「ロシア・アカデミー辞書編纂史における「シソーラス」の思想——「規範」か「総体」か——」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第50輯第2分冊 2005年2月 P. 125-136 2. 源 貴志「新時代ロシアのアカデミー—詳解辞典——伝統の継承・発展と迷走——」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第55輯第2分冊 2010年2月 P. 157-171 3. 源 貴志「ロシア・アカデミー辞典の系統図——継承の実際——」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第56輯第2分冊 2011年2月 P. 191-202
- (3) Крысин Л. П. Рассказы о русских словарях: Кн. для учащихся. 2-е изд. М.: Рус. слово, 2013. 著作権標示から推して初版は2011年の刊行であり、この第2版はその同一内容版と思われるが、初版は未見。
- (4) Бобунова М. А. Русская лексикография XXI века: Учеб. пособие. М.: Флинта; Наука, 2009.
- (5) Словарь русского языка: В 4 т. / АН СССР. ИЯЗ (Т. 1); ИРЯЗ (Т. 2—4). М.: ГИИНС, 1957—1961; 2-е изд., испр. и доп. / Под ред. А. П. Евгеньевой; АН СССР. ИРЯЗ. М.: Рус. яз., 1981—1984.
- (6) Словарь современного русского литературного языка: В 17 т. М.; Л., 1948—1965.
- (7) Словарь современного русского литературного языка: В 20 т. 2-е изд., перераб. и доп. М.: Рус. яз., 1991—[1994]. Издано только 5 кн. (Т. 1—5/6), а потом издание прекращено; Большой академический словарь русского языка / РАН. ИЛИ. М; СПб.: Наука, 2004—。
- (8) 現在刊行中の〈大辞典〉も、この『アカデミー・ロシア語詳解辞典』も、完結予定の巻数が示されていない。従来の〈大辞典〉〈小辞典〉のいずれも、扉（両開き扉 разворотный титульный лист の左側 контртитул に、「全4巻」«В четырех томах»）のように、全体の巻数が示されていた。一方で、学術アカデミー等の編纂にかかる言語辞書では、古語辞典（後述）や方言辞典、語源辞典などにおいて、全巻の巻数を定めず、随時、薄い「分冊（выпуск）」の刊行を重ねるかたちを採っている例が多いが、今回の2種の辞典（〈大辞典〉〈小辞典〉）は「巻（том）」の呼称を用いている。
- (9) 「ロシア語ロシア文学参考図書目録」(<http://www.i3.ocn.ne.jp/~minamoto/Spravochnik/Spravochnik.html>) —註2の2. の論文の註3を参照。この目録編纂の経緯については、「露文文学参考図書目録の編纂について」『ロシア文学研究の伝統と最前線 早稲田大学露文科復活五十年の歩み』（早稲田大学文学部ロシア文学専修 1997年3月 P. 281-285）を参照。
- (10) なお、本稿では、アカデミーと一定の関係を保ちつつも、最大の民間（巷間）辞書を完成させたウラジーミル・ダーリの辞書には触れない（参照：源 貴志「10 ウラジーミル・ダーリの生誕200年と『ダーリの辞書』」『ロシア・中欧・バルカン世界のこぼれ文化』桑野 隆・長興 進編著 早稲田大学国際言語文化研究所 成

文堂 世界のことばと文化シリーズ 2010年6月 P.191-205)。また、〈排除〉の対象として図に挙がっている〈百科項目〉のロシア語辞書編纂史における取扱いについては、註2の2.の論文のP.164-165を参照。

- (11) この литературный язык の用語については拙稿（註2.の1.）に付した註5で簡単に整理している。
- (12) Крысин Л. П. Рассказы о русских словарях. С. 14—15.
- (13) Срезневский И.И. Материалы для словаря древнерусского языка по письменным памятникам: Т. 1—3 и «Дополнительный. том». СПб.: Акад. наук, 1893—1912.
- (14) Словарь русского языка XI—XVII веков. М.: Наука, 1975— .
- (15) Словарь русского языка XVIII века. Л.: Наука, 1984— .
- (16) Словарь древнерусского языка (XI—XIV вв.): В 10 т. / Гл. ред. Р. И. Аванесов; АН СССР. ИРЯЗ. М.: Рус. яз., 1988— .
- (17) Новое в русской лексике: Словарные материалы-77 / Под ред. Н. З. Котеловой. АН СССР. М.: Рус. яз., 1980. これは1977年を対象としたものだが、このあと1985年までの各年と1991年を対象としたものがそれぞれ刊行された（計10冊）。
- (18) Новые слова и значения: Словарь-справочник по материалам прессы и лит-ры 60-х годов / Под ред. Н. З. Котеловой, Ю. С. Сорокина; АН СССР. ИРЯЗ. М.: Сов. энциклопедия, 1971; Новые слова и значения: Словарь-справочник по материалам прессы и лит-ры 70-х годов / Под ред. Н. З. Котеловой; АН СССР. ИРЯЗ. М.: Сов. энциклопедия, 1984.
- (19) Словарь новых слов русского языка (середина 50-х — середина 80-х годов) / Под ред. Н. З. Котеловой; РАН. ИЛИ. СПб.: Дмитрий Буланин, 1995.
- (20) Толковый словарь русского языка конца XX века: Языковые изменения / Под ред. Г. Н. Складчиковой. СПб.: Фолио-Пресс, 1998; Толковый словарь русского языка начала XXI века: Актуальная лексика / Под ред. Г. Н. Складчиковой. М.: ЭКСМО, 2006.
- (21) Крысин Л. П. Словарь иностранных слов: Свыше 7000 слов и выражений: Толкование значений: Происхождение: Употребление / РАН. М.: АСТ-Пресс Книга, 2012. (Настольные словари рус. яз.).
- (22) Словарь иностранных слов / Гл. ред. Ф. Н. Петров. М.: ГИИНС, 1939.
- (23) Бабкин А. М., Шенденцов В. В. Словарь иноязычных выражений и слов, употребляющихся в русском языке без перевода: В 2 кн. / АН СССР. ИРЯЗ. М.; Л.: Наука, 1966.
- (24) Бабичев Н. Т., Боровский Я. М. Словарь латинских крылатых слов: 2500 слов / Под ред. Я. М. Боровского. М.: Рус. яз., 1982.
- (25) 学術アカデミー言語学研究所については、註2の2.の論文、P.161を参照。
- (26) Словарь русских народных говоров / АН СССР. Словарный сектор. М.; Л.: Наука, 1965— .
- (27) Словарь современного русского народного говора (д. Деулино Рязанского р-на Рязанской обл.) / Под ред. И. А. Осовецкого; АН СССР. ИРЯЗ. М.: Наука, 1969.
- (28) Мокиенко В., Никитина Т. Большой словарь русского жаргона. СПб.: Норинт, 2001.
- (29) Мокиенко В., Грачев М. Русский жаргон: Историко-этимологический словарь: Происхождение жаргонных слов и выражений: Доступное пояснение: Примеры из тюремного фольклора. М.: АСТ-Пресс Книга, 2009.
- (30) Розенталь Д. Э. Прописная или строчная?: Опыт словаря-справочника: Ок. 8500 слов и словосочетаний. М.: Рус. яз., 1984.
- (31) Слитно или раздельно?: Опыт словаря-справочника: Ок. 43000 слов / Сост. Б. З. Букчина, Л. П. Калакуцкая, Л. К. Чельцева; Под ред. Д. Э. Розенталя. М.: Сов. энциклопедия, 1972.
- (32) Орфографический словарь русского языка: 110000 слов / Под ред. С. И. Ожегова, А. Б. Шапиро; АН СССР. ИРЯЗ. М.: ГИИНС, 1956.
- (33) Русские литературное ударение и произношение: Опыт словаря-справочника: Ок. 50000 слов / Под

- руководством. и ред. Р. И. Аванесова, С. И. Ожегова. М.: ГИИНС, 1955.
- (34) *Агеенко Ф. Л., Зарва М. В.* Словарь ударений для работников радио и телевидения / Под ред. К. И. Былинского. М.: ГИИНС, 1960.
- (35) Орфоэпический словарь русского языка: Произношение, ударение, грамматические формы: Ок. 63000 слов / Под ред. Р. И. Аванесова; АН СССР. ИРЯЗ. М.: Рус. яз., 1983. ただし、固有名詞を扱っていない。
- (36) Словарь синонимов русского языка: В 2 т. / Гл. ред. А. П. Евгеньева; АН СССР. ИРЯЗ. Л.: Наука, 1970—1971.
- (37) Новый объяснительный словарь синонимов русского языка. Вып. 1—3 / Под общ. ред. Ю. Д. Апресяна; РАН. ИРЯЗ. М.: Языки рус. культуры, 1997—2003.
- (38) *Львов М. Р.* Словарь антонимов русского языка: Ок. 2000 антонимич. пар / Под ред. Л. А. Новикова. М.: Рус. яз., 1978.
- (39) *Окунева А. П.* Словарь омонимов современного русского языка: Ок. 5000 слов и словосочетаний. М.: Рус. яз., 2002.
- (40) *Бельчиков Ю. А., Панюшева М. С.* Словарь паронимов современного русского языка. М.: Рус. яз., 1994.
- (41) Учебный словарь сочетаемости слов русского языка: Ок. 2500 словарных статей / Под ред. П. Н. Денисова, В. В. Морковкина; Ин-т рус. яз. им. А. С. Пушкина. М.: Рус. яз., 1978. この辞書は非常に充実したもので、1983年の第2版では、内容は変わらないまま、タイトルから「学習 учебный」の語が削除された。
- (42) Фразеологический словарь русского языка: Свыше 4000 словарных статей / Под ред. А. И. Молотова. М.: Сов. энциклопедия, 1967.
- (43) Фразеологический словарь русского литературного языка конца XVIII—XX в.: В 2 т.: Ок. 7000 словарных статей / Под ред. А. И. Федорова. Новосибирск: Наука, 1991.
- (44) Большой фразеологический словарь русского языка: Значение. Употребление. Культурологич. комментарий / Отв. ред. В. Н. Телия. М.: АСТ-Пресс Книга, 2006.
- (45) *Тихонов А. Н.* Словообразовательный словарь русского языка: В 2 т.: Ок. 145000 слов. М.: Рус. яз., 1985.
- (46) *Фасмер М.* Этимологический словарь русского языка: В 4 т. / Пер. с немец. и доп. О. Н. Трубачева; Под ред. и предисл. Б. А. Ларина. М.: Прогресс, 1964—1973.
- (47) Этимологический словарь русского языка / Под ред. Н. М. Шанского; МГУ. Филологич. ф-т. М.: Изд-во МГУ, 1963—.
- (48) *Аникин А. Е.* Русский этимологический словарь / РАН. ИРЯЗ; ИФ Сибирского отд-ния РАН. М., 2007—.
- (49) 例えば、*Крысин Л. П.* Рассказы о русских словарях. С. 9.
- (50) 単に辞書の用例の問題だけではなく、国語と文学の成立の問題として別途考える必要がある。
- (51) もちろん、既存の2巻だけでも判断できることはないわけではない。とりあえず、辞書の内容に関わる本質的な問題ではないことに一つ触れておくと、紙面の印刷が [パソコン+レーザープリンタ] のレベルであり、しかも、用例中のダッシュ (тире —) のかなりの部分がハイフンの3連打 (---) のままであるのは、アカデミー出版物の品質としては、にわかには信じがたいほど低いものであるのは残念である。
- (*) 前項に触れたような、新しい語彙として大量に流れ込んできている外国語起源のものと、ロシア語のなかである程度定着した〈外来語〉とのあいだでは、語彙としての性格は異なるはずであるが、辞書編纂の実際上では、いずれも「иностранные слова」で区別がない。
- (***) 21世紀に入ってから、ソ聯時代に編纂・刊行されたもので、学術的な水準は高くても、学習者向けという理由などでアカデミーの刊行物とはされていなかった中規模の辞典の新版が、「Библиотека словарей русского языка」や「Библиотека словарей РАН」、《Словари XXI века》というシリーズ名のもとに、同一意匠で刊行される例が続いており、これらは学術アカデミーのシリーズという扱いになっている。そこには R. I. Ялантцёв (Р. И. Яранцев) の熟語辞典や M. R. Ривзюф (М. Р. Львов) の反義語辞典 (註38) などが含まれている。